班会にゲスト、読者を会員にと会員目標達成！

青森・八戸支部

要求いっぱい 会員大募集！

楽しい班会や、しんぶんタイムでのおしゃべりが好評で仲間を迎え、支部は会員の前大会時現勢を突破し、会員の目標も達成しました。今年に入り、9班で会員を14人迎えています。「減ったら増やす」を合言葉に、「班から仲間づくり」にとりくんでいます。

楽しい班会、しんぶんタイムが魅力

全15班でほぼ毎月開かれる班会では、「異常気象で、お米も野菜も心配」「八戸名物のサバやイカが高くて買えない」「新婦人しんぶんは、今知りたいことが載っているので楽しみ」など、しんぶんタイムでのおしゃべりがはずみます。

看護師を講師に「認知症を知る学習」「筆ペンでゆる文字を書いてみよう！」「八戸公園のバラ園におでかけ」など、楽しいことをとりいれた班会が魅力に。班会の様子は支部ニュースで紹介し、「うちでも今度やってみよう」と班同士の交流にもなっています。もちろんお出かけでも、しんぶんタイムはしっかりとります。

班会では仲間づくりの相談を欠かしません。吹上班では、「あの人オカリナに興味があるんだって」「小組に誘ってみよう」など、対象者をあげます。白銀（がね）班は銭湯で知り合った人に声をかけたり、「会を支える会員に」と読者に話して、うぐいす班は「いのちのとりで」裁判で知り合った人に新婦人を伝えてなど、つながりで仲間を迎えてきました。「どの班にも読者はいる」と読者への訴えを強め、杉の子班は高齢の読者に「ぜひ会員に」と率直に伝え、会員に迎えています。6月の合同体験会は、班からゲストを誘うことにこだわり、ゲストが16人に。「ハマナスのブローチ作って楽しかった」とひまわり班のゲストが入会しました。

合同体験会は吹上班・オカリナ小組の演奏でスタート

行動する班、会員の裾野をひろげて

この間、中央本部主催の全国交流会議（オンライン）への参加を強めてきました。がんばっている県や支部にたくさんの元気をもらい、「1班1要求」「全班で原爆展」など、良いとりくみはすべて実践しています。

「班から仲間づくり」と提起しても、「対象者はいない」「うちの班は無理」など一筋縄ではいきません。そんな時はみんなで、「元会員でお茶の先生のNさんは？」「年齢は関係ないから声かけてみたらいいじゃない」「新婦人を支えてって言えばいいのよ」と励ます。最初は「高齢なのですすめられない」と言っていた人も、「会を支えてくれる会員なんだから、班会に出られなくても大丈夫よ」「ゆるやかなつながりが大事」とみんなに応援され、「声かけてみるわ」と前向きに。

毎月の支部委員会と班長会議は、何でも話せる、言いたいことを出し合える雰囲気を大事にしています。議題は半分以上が仲間づくりです。行き詰っている班があれば、みんなで知恵を出し合い、励まして行動につなげています。

会議では、「公会堂のドアが重いので自動ドアにしてほしい」「公民館の和式トイレを洋式に」「バス停にベンチ設置を」「市営バスの補助券復活を」など班からの要求もたくさん出され、支部全体で共有しています。新婦人は要求実現の会。市への要求も「仲間を増やして大きくなれば実現しやすくなるよね」と、「班からの仲間づくり」をコツコツすすめてきました。

全国大会まであとわずか。まだ6班で仲間づくりができてません。班とつながって、全班成果達成をめざしがんばります。

（事務局長　中屋敷（なかやしき）和子）

参政党の神谷代表発言に抗議！緊急アクション

主張

新婦人創立63年　動かしてきた女性たちの歩みさらに

自民党の総裁に高市早苗氏が選ばれました。次つぎと発表されている自民党執行部は〝古い自民党〟そのままで、裏金議員の復活、選択的夫婦別姓反対、大軍拡路線まっしぐらです。

岐阜支部がさっそく「高市自民新総裁に期待する？しない？」と街頭でのシール投票に飛び出すと、反応は真っ二つ。「どうして？」と話を聞く中で、暮らしの大変さや大軍拡の問題点、裏金議員への怒りが語られ、原爆パネル展では核兵器廃絶へとおしゃべりはとまりません。カギは「対話」です。神奈川・西支部は、地元の商店街で毎月仲間ふやし行動に取り組み、その場で3人入会など、仲間を迎えています。生活が大変ななか、「物価高はどうですか？」と聞くと、親の介護の悩みやダブルワーク、孫の学費のため清掃で働いている、子どもが不登校で経済的に大変など、女性の悩み、苦しみが語られ、「新婦人で一緒に」と話すと、入会や読者になるなど新しいつながりが生まれています。

新婦人は、創立当時から、一人ひとりの苦しみに焦点をあて、仲間とともに、「おかしい」「こうしてほしい」と声をあげ、動かしてきました。新自由主義がおしすすめられる中、「自己責任論ではなく、社会に問う」ことを重ね、対話やおしゃべりのなかから迫ってきました。

今号は、創立記念号です。ぜひこのしんぶんを持って、対話をひろげましょう。読者のあなたもぜひ、新婦人に入会しませんか。平塚らいてうから続く、シスターフッド（たたかう女性たちの連帯）をともにつないでいきましょう。

〈新連載・月１回〉

「ふつう」を問い直す

社会の縮図の学校で

ジェンダー教育実践家　星野俊樹

はじめまして。星野俊樹と申します。まずは自己紹介を兼ねて、このコラムを始めたいと思います。

兵庫県に生まれ、東京で育ちました。大学卒業後は出版社に勤めていましたが、教育現場で人と関わる仕事がしたいと思い、小学校教員に転じました。教員生活は20年ほどになります。たくさんの子どもたち、そして同僚や保護者と出会いながら、学校という小さな社会が映し出す“社会の縮図”のような場面をいくつも目にしてきました。

私はシスジェンダー（※編集部注：性自認と生まれ持った性別が一致している人）のゲイ男性です。子どものころから、いわゆる「男らしい」と言われる振る舞いができず、よく「男の子なんだから」「男らしくしなさい」と注意されてきました。そのたびに、胸の奥で「ふつうってなんだよ」と小さくつぶやいていたのを覚えています。自分が息苦しさを感じてきた「ふつう」という価値観に、少しでも揺さぶりをかけたい。そんな思いが、教員を志した理由のひとつでした。

教室では、たとえば「男なんだから泣くな」「女の子なんだからおしとやかに」といった言葉が当たり前のように飛び交います。男の子が散らかし、女の子が片づける光景も珍しくありません。こうした“何気ないふるまい”の中にこそ、ジェンダーの固定観念が潜んでいるのではないか。私は子どもたちと一緒に、「ふつうってなんだろう？」を考える授業を続け、ともに問いを立て、語り合う時間を大切にしてきました。

制度や慣習の枠の中に収まりきらない声を、もっと自由に届けたいと思うようになり、2025年３月末に教員を退職しました。現在は教育とジェンダーをテーマに、学校や大学、企業、自治体などで講演や執筆活動をしています。今年６月には『とびこえる教室―フェミニズムと出会った僕が子どもたちと考えた「ふつう」』（星野俊樹／時事通信社／1700円＋税）を出版しました。

『とびこえる教室―フェミニズムと出会った僕が子どもたちと考えた「ふつう」』

この連載では、学校という社会の縮図から、ジェンダー平等のための教育の可能性と課題を一緒に考えていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

1　子どものころから感じていた息苦しさ